

# 住

## 茶食住+山を考えるミーティング [住]分科会

### テーマ：県産材を活用した住まいづくり

#### コーディネーター

山梨大学教育人間科学部  
教授

#### 田中 勝



#### 県産材を使った住まいづくり活動を広げよう

山梨県における県産材の需要拡大を目的として2001年度から8年間、県の「甲斐の家プロジェクト」に関わってきました。山梨の気候・風土や生活様式に根ざした木造住宅のアイデアを公募し、優秀作品をもとにワークショップを行い、アイデアをペーパークラフトとして具体化する事業です。2003年度には県産材をふんだんに使った甲斐の家モデルハウスも誕生しました。

静岡県は森林資源が豊富で気候にも恵まれています。県東部には良質な木材があり、木の住まいづくりの先進県となりうる地域です。今回の「住」分科会では、県産材を県民にもっと使ってもらうと、製材業、施工者、設計者の立場から多くの努力やユニークな取組が行われていることが示されました。県産材の品質向上や安定供給、コストダウンに加えて、今後は県産材住宅に関する正確な情報提供や相談体制の充実が必要です。設計者による住み手との対話も欠かせません。学校・家庭・地域において木の住まいづくり活動への参加や体験の機会を育み、実践し、交流できるような仕組みづくりに期待します。



「住」分科会・会場

#### パネリスト

富士木材株式会社  
代表取締役専務

#### 川口 祐介



川口 祐介[かわぐち ゆうすけ]  
富士市出身。東京都市大学建築学科卒業後、東京の建設会社に勤務、一級建築士の資格を取得し富士市に帰省、富士木材株式会社に入り現在に至る。

#### 県産材の良さを引き出す

県産材を使うメリットはまず地元の山を守る環境貢献、そして同じ風土で育った木が耐久性や強度に優れているということです。実際に使ってみると、白蟻や腐りに対して安心なのはやはり地元の木ではないかなと思います。強度についてもヒノキには数値上の強度だけではなく、木そのものであったり組み合わせられたときの粘りがあって、外材とは違う良さがあると感じています。

デメリットは価格が若干高いこと。調達に困難というも確かにあります。県東部でもしおか優良木材認定工場が出てきましたが、まだまだ地元で挽いた木材が流通に乗って手に入る状況ではありません。それからスギは、曲げ強度が低く強度計算では厳しい数字になります。強度を確保するために少し大きい寸法のものを使うこともコスト高につながっています。含水率のばらつきや割れなど、施工上扱いが難しいところも普及を阻害している要因かもしれません。それでも、使ってみると県産材の良さは実感できるはずで



「住」分科会・会場

#### パネリスト

一級建築士事務所  
アトリエK 代表

#### 植松 敬子



植松 敬子[うえまつ けいこ]  
沼津市出身、長泉町在住。日本大学短期大学部建築学科卒業後、設計事務所勤務を経て、1997年にアトリエKを始める。

#### 木の良さは、心地よさのデザイン

私がとても大事にしている設計の手法の中に『木の良さは、心地よさのデザイン』という考え方があります。デザイン、室内環境、安心できる構造体、職人の手技がもたらしてくれる心地よさ、そして、信頼を与える心地よさ、このポイントを常に大事に設計させていただいています。

#### 一本一本の木の個性に気配りを

木は本当に生きています。山で50年、60年生きた木が建築の柱になり床材になり生き続けます。木は呼吸します。夏や湿気の多い時には水分を吸ってくれ、また冬の乾燥期には水分を吐き出してくれます。木は、時間の経過と共に色



大ホールロビーでの展示

を出し、艶を出し、変化をしていきます。一人一人個性があるように木の一本一本に個性があります。適材適所の気配りがとても大事だと思っています。

#### もうひとつ

地元で育った頑丈な木  
でつくる家



先代が「富士ひのき加工協同組合」を立ち上げ、地元材がしっかりとした製材品として出てくるようになったのを受け、それを使った家を「富士木材株式会社」で建てていくことになって約10年。富士ひのきをはじめとして天竜杉や静岡杉など県産材を使った家づくりを行っています。中でも富士ひのきは富士山麓の火山灰土で育っているため強度が強く柱や土台に多く使われているそう。外材が安く流通しているため、地元で成長した木が伐採されているにも関わらず、一般的には地元材を使うということがまだまだ認識されていない現状に対し、川口さんはこう話します。

「住まい手が、使命感や社会貢献などという重たいテーマではなく、こんな家に住みたいと自然に感じてくれるような家をつくること。住みやすく、いい環境の、頑丈な家。それが地元材を使った家だった。そういう流れになれば地元材がもっと使われていくようになると思います」。

富士ひのき加工協同組合立ち上げ後、県内の製材業者を通じて出てくる流れが少しずつ増加して



施工例

ており、今後の林業、山の環境保全のためにも、地元材を取り入れ、環境にあった家づくりを提案しています。

#### パネリスト

富士山木造住宅協会  
事務局長

#### 遠藤 龍一



遠藤 龍一[えんどうりゅういち]  
富士市出身。情報処理専門学校卒業後、株式会社マルダイに勤務。

#### 県産材を活用するために

流通の部門において、県産材の有効活用のためにどういう仕組みを作っていくべきかということで、富士山木造住宅協会の中に委員会を立ち上げました。その中で3年前から地域材を使っていく取組を進めています。

静岡県は、まだまだ木材の自給率が低いのです。日本の住宅は国内の木で全て賄えるのですが、集成材は狂いが無い、または、輸入材は安いという金額的な面等がその理由です。また、県産材だけでなく全国的なことですが、割れの問題等があり、少し使いづらい部分はまだあります。

#### 「緑の循環」を体験

地域材の調達の基準作りということで、木材の出所を把握する取組もしています。流通時に他の木材と混ざらないよう徹底的に努力することや、富士山の木というブランドの普及啓発など、地元でできることは1つずつでもやっという活動です。「木こりツアー」の開催や、製材所の見学で流過程を施主さんに全て見て体験していただいたり、「緑の循環」を意識してもらうために、お施主さんに日曜に子連れで苗木を植える「植林ツアー」や、端材を使って学習机を作ってもら



「住」分科会・会場

という活動もしています。流通の流れを見ていただくことで、地域の材料を使って良かったと言ってもらえることが大切なのです。

#### もうひとつ

地域のネットワークを強化し、県産材を使う環境を整える

元々流通業者として資材を売っていた遠藤さん。しかし資材を売っているだけでは、地域工務店を助けられないと、現在の事務局を設立。工務店などとネットワークを組み、セミナーの企画や地域材の普及を図るための活動をしています。



株式会社マルダイ・工場

主に、地域工務店の人たちが、建築業界におけるさまざまな法律を勉強するセミナーを企画したり、大工の後継者を増やすために、人材の育成や技術の継承に力を入れるなど、地域と密接に関わり合いながらの活動が多いそうです。

「自分や工務店の方が生まれ育ったこの場所で、地域の木材をうまく循環させることが、配送にかかるコストやCO2の削減につながり、空気も水もきれいになります」と話します。

今後は事務局の体制の強化と、会員への情報の普及の徹底を目指し、より地域に根付いた活動を続けていきたいと意欲的です。



株式会社マルダイ・県産材

#### もうひとつ

生きている木を使う。その安心感を伝えることが大切

6畳一間のごちんまりとした事務所で、一軒一軒丁寧に手書きの図面で住宅設計をしている植松敬子さん。何よりも、心地よさや安心のある住宅造りを心掛けているといえます。

県産材を使用するときには、クライアントと共に森に入り、「実際にこういう場所で育ち切り出した木が、これから建てようとする住宅に使われていくのだ」という安心感や親しみを持ってもらうことからスタートしていくのだそう。そして、植松さんがそれまでに建てた家を見学してもらい、自然の持つ力が起こし得る木の割れ等の変化を体験し、それらは構造的に問題なく、それこそ木が生きている証だということを理解してもらっています。

1つずつ丁寧に設計していく家づくりは年に1~2軒が限度。それでも周りの環境のことを考え、やさしい家づくりをした家が一軒でも住宅街にあれば効果がある。まるで母親が子どもを育てるかのように、愛情を注ぎやさしい家づくりをしている。



アトリエK事務所